



Title	マルセラに宿る狂信と不寛容：「グリソストモの葬式のエピソード」『ドン・キホーテ正編』（第11章～第14章）についての新たな解釈の試み
Author(s)	鈴木, 正士
Citation	言語文化研究紀要 : Scripsimus(28): 47-78
Issue Date	2019-10-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/45146
Rights	

マルセラに宿る狂信と不寛容

—「グリソストモの葬式のエピソード」『ドン・キホーテ正編』 (第11章～第14章) についての新たな解釈の試み—

鈴木 正士

0. 本稿のテーマ

『ドン・キホーテ正編¹⁾』(*El ingenioso hidalgo don Quijote de la Mancha*, 1605) 第11章から第14章のエピソード(「グリソストモ(Grisóstomo)とマルセラ(Marcela)のエピソード」と呼ばれることが多いが、筆者は「グリソストモの葬式のエピソード」と名づけ本稿まで五稿にわたって研究を続けている)において、マルセラは賢明なすばらしい女性として描かれているように見える。第14章のマルセラの弁明を聞いたキホーテや彼女の村の者たちは皆マルセラの思慮深さに感嘆するし²⁾(128³⁾、研究者もマルセラの弁明の正当性を支持している⁴⁾。

しかし、第12章で山羊飼いペドロ(Pedro)は「グリソストモが死んだのは悪魔にとりつかれた娘マルセラを好きになったためだ⁵⁾」と、マルセラを「悪魔にとりつかれた娘⁶⁾」(*aquella endiablada moza*) (103)と言う。「悪魔にとりつかれた」(*endiablado/a*)という形容詞には「邪悪な」の意味もあるが、「邪悪な」の意味の形容詞は他にあるにもかかわらず、セルバンテスは敢えて、マルセラに対して*endiablada*という形容詞を用いている。キリスト教世界において〈悪魔〉(*diablo*)は過激な言葉である⁷⁾。また、第13章のグリソストモの葬式の場で、彼の友人のアンプロシオ(Ambrosio)は、マルセラを「人間の大敵」(*enemiga mortal del linaje humano*) (117)と形容する。マルセラはグリソストモをはじめ多くの男からの求愛を拒絶した(106-8)のだから、仮に敵と呼べるとしたら〈男の敵〉のはずにもかかわらず⁸⁾、「人間の大敵」とまで言われる。

これほど厳しい言葉がマルセラに向けられるのは、セルバンテス(Miguel de Cervantes Saavedra, 1547-1616)がマルセラという女性を批判の対象としているからではないだろうか。

では、なぜセルバンテスは、評判の高いはずのマルセラを、多くの読者が読み飛ばしてしまいそうな箇所で、「悪魔にとりつかれた」「人間の大敵」と記して彼女を批判するのだろうか。それは、マルセラが過度な信仰をもち、《神》との一体化、つまり《神》との《結婚》を望んでいるからだ、と筆者は考える。過度な信仰を疑問視していたセルバンテスは、異端審問(Inquisición)を警戒したため⁹、多くの読者に気づかれないようにテキスト中でひそかに、《神》との《結婚》を念じるマルセラを批判しているものと思われる。

セルバンテスは、エラスムス(Desiderio Erasmo, 1467?-1536)の《人間》中心思想の強い影響下にあったと考えられる¹⁰。エラスムスの《人間》中心思想においては《結婚》が重要視されていた¹¹。

マルセラに求愛したが拒絶され自殺するグリソストモを描くことで、セルバンテスは、《人間》との《結婚》を拒絶し《神》との《結婚》を念じるマルセラを暗に批判しているのだ。テキストにはグリソストモの死に方について記されていないが、彼は自殺した、と筆者は考える。キリスト教信者が、キリスト教が厳禁する自殺という大罪を犯したのだから、彼は地獄に落ちたはずだ。つまりマルセラは、《神》との《結婚》を念じたために、グリソストモからの求愛を拒み、皮肉なことに、グリソストモという《人間》を地獄に陥れる〈悪魔〉と化した。そのためマルセラは「悪魔にとりつかれた」「人間の大敵」と形容され、セルバンテスによって批判されている、と考えられる。

本エピソードにおいてセルバンテスは、「悪魔にとりつかれた」「人間の大敵」マルセラと彼女によって自殺に追い込まれるグリソストモをとおして、17世紀スペインにおける狂信と不寛容の精神を訴えているのではないだろうか。

そこで、「グリソストモの葬式のエピソード」研究の最終稿である本稿において、まず、本エピソードでセルバンテスはマルセラを、《神》との《結婚》を念じグリソストモを自殺に追い込む者として造形し、彼女を批判の対象としている、ということを示したい。そして、過度な信仰に走るマルセラと彼女によって滅んでしまうグリソストモの姿をとおして、同時代の狂信と不寛容の精神をひそかに厳しく批判している、という点を明らかにしたい、と筆者は考える。

そのため、まず1で本エピソードの梗概を紹介し、次に2と3でエラスムス思想に傾倒していたセルバンテスは、《神》との《結婚》を念じる者としてマルセラを造形した、という点を確認したあと、4と5と6では第11章と第14章の対照性からセルバンテスのマルセラ批判を明らかにする。つづく7と8では異端審問が機能していた時代だったためセルバンテスは《人間》中心思想を隠していたという点を見ていく。9ではセルバンテスはテキスト中でマルセラをひそかに強く批判していることを確認し、ついで10と11と12ではマルセラの過度な信仰がいかにかにグリソストモを苦悩させ自殺へと向かわせたのか、考察を加える。そして、セルバンテスの批判にもかかわらずマルセラは多くの人に称賛されているのだが、やはり彼女は狂信に至り不寛容を貫いた女性であることを13で示し、最終的に14で「グリソストモの葬式のエピソード」研究の結論に至りたいと考える。

1. 「グリソストモの葬式のエピソード」の梗概

まず、本エピソードの梗概を紹介したい。

第11章では、山羊飼いたちの小屋で、オラーリャ (Olalla) という娘への叶わぬ恋に悩む山羊飼いやアントニオ (Antonio) が、キホーテ達に〈希望の歌〉を歌う (95-102)。この歌は、アントニオが、《人間》中心思想を抱いていると思われる彼の〈司祭である叔父〉に作ってもらった歌で、オラーリャがアントニオを愛しているはずだという希望が歌われた歌である。第12章では、小屋にやってきた山羊飼いやペドロによって、グリソストモの死とグリソストモとマルセラの事件が語られる。幼いころ両親を亡くしたマルセラは、村中の人から尊敬される、彼女の〈司祭である叔父〉に育てられた。その後、マルセラは突然羊飼いやになる。するとマルセラを愛するサラマンカ大学 (Universidad de Salamanca) の学士グリソストモも羊飼いやとなり、マルセラを追い求めるが、彼女に拒絶される。そして、「悪魔にとりつかれた娘」マルセラを愛したグリソストモは結局その朝亡くなり、次の日葬式が営まれる、とペドロは話す (103-9)。第13章では、翌朝、グリソストモの葬式の間へ向かうキホーテは、同じく葬式の間へ赴こうとしていた紳士ビバルド (Vivaldo) と出会う (109-10)。途上ビバルド

はキホーテに、遍歴の騎士が戦いの前に、《神》にではなく思い姫に加護を求める理由を尋ねるが、キホーテは明快な解答を示さない(110-16)。到着した葬式の場で、「人間の敵」ともいうべきマルセラからグリソストモはどれほど冷たい仕打ちを受けたか、その点については彼の遺稿に詳しいと、グリソストモの友人アンブロシオから聞いたビバルドは、遺稿の詩『絶望の歌』 *Canción desesperada*¹²を朗読し始める(116-19)。そして第14章で、〈ぼく〉と〈きみ〉が主人公の『絶望の歌』が読まれるが(119-24)、それが読み終わられたとき現れたマルセラは、自分の意思をすべて正直にグリソストモに伝えたにもかかわらず彼は理解してくれなかったと自分の立場を弁明すると、すぐに立ち去る(124-28)。弁明を聞いたキホーテや村の人々はマルセラの正当性を認め、彼女を称賛する。アンブロシオは墓石に碑文を刻もうと考えていると言う(128-29)。以上が本エピソードの梗概である。

2. セルバンテスにおけるエラスムス思想の強い影響

セルバンテスがエラスムスの思想の強い影響を受けていたと最初に唱えたのは、『セルバンテスの思想』(*El pensamiento de Cervantes*, 1925)におけるアメリコ・カストロ(Américo Castro, 1885-1972)である¹³。本エピソードにもエラスムスの影響は色濃いと筆者は考える¹⁴。エラスムスは『対話集』(*Colloquia*, 1518-33)において、《結婚》を、キリスト教社会やキリスト教信仰が維持されるために愛と性によって子供を産み《人間》の命をつないでいく営みと捉え、重要視している¹⁵。過度な信仰に疑問を抱いていたセルバンテスは、エラスムスのこのような《人間》中心思想に共鳴し¹⁶、マルセラを《神》との《結婚》を念じたために《人間》との《結婚》を望まなくなった者として造形し、彼女を批判している、と考えられるのである。

本エピソードには、『対話集』のなかの、《結婚》をテーマとする「恋する青年と乙女」(“Proci et puellae”)の影響が見られる¹⁷。セルバンテスがマルセラを批判の対象として造形しているという点は、「恋する青年と乙女」の青年パンフィルス(Pamphilus)と乙女マリア(Maria)の関係とグリソストモとマルセラの関係の共通点と相違点からうかがえる¹⁸と筆者は考える¹⁹。

最初パンフィルスがマリアから愛されない状況は、グリソストモとマルセラの状況と重なる。しかし、マリアが最後にはパンフィルスとの《結婚》を承諾するのに対して、マルセラはあくまでグリソストモとの《結婚》を拒絶する。その結果、パンフィルスはマリアとの幸せな生活が約束される。それに対して、グリソストモは自殺する。

エラスムスの《人間》中心思想の影響を受けていたセルバンテスは、マルセラを、《人間》との《結婚》を拒絶したためにグリソストモを死に追い込む者として造形し、彼女を批判の対象としているのである。

3. 《神》との《結婚》を念じるマルセラ

マルセラがグリソストモという《人間》との《結婚》を拒絶するのは、彼女が《神》との《結婚》を念じているからだ。この点は、第14章のグリソストモの葬式における彼女の弁明の言葉から明確になる。

弁明の中でマルセラは「山野の樹木を相手に純潔を守っている」(127)と言う。

この言葉は、村里から逃れた彼女が自然の中で《神》に帰依することを意味している、と考えられる。《神》が与えてくれた純潔という美を守ることで、《神》に感謝し、心身を捧げている、と思われるからだ。そしてマルセラは、彼女が魂の源と考える、現世を超越した天上世界に憧憬している、と筆者は考える。なぜなら、彼女は弁明の最後で、「わたしの望むものは、この山々に限られています、ただそこを抜け出すときがあるとすれば、美しい天、つまり魂が生まれた場所へとたどる通り道をながめるときだけです」(127-28)と訴えるからである。

聖なる世界には禁欲的な生活をとおしてのみ到達できる、と彼女は信じている。自然とは、マルセラにとって、社会から離れ孤独の中に閉じこもった状態で《神》を念じ《神》と邂逅できる場所、つまり修道院なのだ。マルセラは、自然という修道院で孤独に純潔を守ることで《神》と《結婚》できると考え、実践しているのではないだろうか²⁰。

マルセラは《神》との《結婚》を念じているのである。

4. 第11章のアントニオと第14章のマルセラの対照性

《神》との《結婚》を望み過度な信仰をもつマルセラをセルバンテスは批判している。この点は、第11章のアントニオと第14章のマルセラを比較すると、構造面から明らかになる。アントニオとマルセラは共通点を持ちながら対照的な要素も兼ね備えている。第11章と第14章を構造面から比較しよう。

第11章においては、〈司祭である叔父〉をもつアントニオがオラーリャとの《結婚》を望み、〈司祭である叔父〉に作ってもらった〈希望の歌²¹〉という〈物語²²〉を歌い希望を抱く。それとは対照的に、第14章においては、〈司祭である叔父〉をもつマルセラは、《神》との《結婚》を念じ、グリソストモからの求愛を拒み、その結果グリソストモは『絶望の歌』という〈物語〉を書いて自殺する。

第11章と第14章を比較すると、《人間》との《結婚》を望むアントニオに対し、マルセラが《神》との《結婚》を念じているのは明らかだ。そのマルセラと《結婚》できなかったために、グリソストモは自殺し身を滅ぼしてしまう。マルセラはグリソストモを死に追いやるのである。

エラスムスの《人間》中心思想の影響を受けていたセルバンテスは、マルセラを、《神》との《結婚》を念じたためにグリソストモを自殺に追い込む者として造形し、彼女を批判している。この点は、第11章と第14章の構造の比較から明らかになるのである。

5. 《人間》中心的爱を土台として生きるアントニオの〈司祭である叔父〉

アントニオとマルセラの〈司祭である叔父〉も互いに対照的な存在だと考えられる。二人には信仰の在り方に違いが見られる。そこで、それぞれの司祭の信仰に対する考え方を確認したい。まず、アントニオの〈司祭である叔父〉は《人間》中心的爱を土台にして生きる司祭である、という点を見ていく²³。ここにはエラスムスの思想が反映していると思われる。

自分に冷たい態度をとるオラーリャが実は自分を愛しているという内容の歌〈希望の歌〉を〈司祭である叔父〉に作ってもらったアントニオは、〈希望の歌〉を歌いながら、オラーリャという《人間》との《結婚》を夢見ている(100-2)。

アントニオの〈希望の歌〉には、前景に、オラーリャとの恋の成就を願うアントニオの思いがあり、後景に、〈司祭である叔父〉の信仰における《人間》中心思想が隠れている²⁴。

アントニオの〈司祭である叔父〉は〈希望の歌〉の中で自分の考えを次のように表わしている。

教会は絹のひもで

夫婦の絆を結んでくれる(102)。

ここで、教会は男女を《結婚》させるための場であり、教会には二人を結びつける絆となる絹のひもが常に用意されているかのようだ、とアントニオの〈司祭である叔父〉は言っている。男性女性の二人の《人間》を《結婚》させることこそ教会の役割だと、アントニオの〈司祭である叔父〉は考えているのだ。

そして、もし愛が実らず《結婚》できない厳しい事態が起きたときには、キリスト教に頼ればよい、と考えている。次のように詩は続くからだ。

それがだめなら、聖人の中の

聖人にかけて、こう誓おう

カプチン会士にならないかぎり

この山奥から出はしないと(102)

ここでアントニオの〈司祭である叔父〉は、《結婚》できない場合、カプチン会士というキリスト者にならないければ山奥から出て日常生活を営むことはできない、と言っている。

フランシスコ会派の一派であるカプチン会は清貧・苦行・観想的な祈りを会則とするひどく厳格な修道会であり、カプチン会士はこの会の修道士である²⁵。

愛する《人間》と《結婚》できないとき、この世で生きる方法は修道士となってキリスト教にすがることしかない、とアントニオの〈司祭である叔父〉は考えている。つまり、キリスト教を、《結婚》できないという苦しみから逃れるシェルターと見なしているのだ。教会は《人間》を結びつける場、キリスト教は《人間》が生きる苦しみに耐えるための最終的な手段と捉えている。結局のところ、叔父にとって、教会やキリスト教は現世に生きる《人間》の幸福のためにあるものなのだ。

アントニオの〈司祭である叔父〉は、《人間》中心的な愛を土台にして信仰に生きるタイプの司祭なのである。

6. キリスト教信仰を土台として生きるマルセラの〈司祭である叔父〉

《神》との《結婚》を念じるマルセラにも、彼女の両親亡きあと彼女を養育してきた〈司祭である叔父〉がいた。マルセラの過度な信仰は〈司祭である叔父〉の影響なのだろうか。

たしかに、「まったくお見事なキリスト教徒である叔父さん」(106)で始まるマルセラの〈司祭である叔父〉についての山羊飼いペドロの噂話から、叔父が熱心なキリスト教徒であることがうかがえる。しかし、〈司祭である叔父〉がマルセラに《神》との《結婚》を勧めたとは考えられない。なぜなら、彼はマルセラを結婚させたいと願っていたからだ。テキストに「叔父は姪の結婚を引き延ばそうとは考えず、マルセラを結婚させたいと思っていたが、本人の同意なしにそうすることは望んでいなかった」(106-7)と記されている。

にもかかわらず、マルセラは《神》との《結婚》を望むようになった。ということは、〈司祭である叔父〉も予期しないこの成り行きはマルセラの資質によるものだと思われる。つまりマルセラが生来備えていた資質は、思いがけなく、〈司祭である叔父〉の存在に強く感応し、その結果、彼女の心に信仰心の激しい炎が燃えあがった、と考えられるのである。

さて、マルセラの〈司祭である叔父〉に対する山羊飼いペドロの称賛の言葉はさらに続く。「姪の財産管理に関する潔癖さはたいしたもの、たいへん立派な方」と言う。そのために教区の信者たちから尊敬されている、とペドロは付け加える(107)。

マルセラの〈司祭である叔父〉は、まず「まったくお見事なキリスト教徒」(106)であり、その信仰ゆえに、人格者であると教区の信者は考え、彼らは彼を尊敬している。

マルセラの〈司祭である叔父〉はキリスト教信仰を土台として生きるタイプの司祭なのだ。

マルセラの〈司祭である叔父〉の信仰の在り方はアントニオの〈司祭である

叔父)のそれとは対照的だ。アントニオの〈司祭である叔父〉には、まず《人間》との《結婚》という《人間》中心的な愛があり、これを土台にして司牧生活を営んでいる。これに対して、マルセラの〈司祭である叔父〉には、まずキリスト教信仰があり、これを土台として日常生活を営んでいるのである。

前述のとおり、マルセラの〈司祭である叔父〉が彼女に過度な信仰を植えたとはテキスト上からはいえない。ただ、ともに〈司祭である叔父〉のいるアントニオとマルセラがそれぞれ対照的な考えを持つに至ったということは、マルセラに対し、彼女の〈司祭である叔父〉はなんらかの影響を与えたと考えられる。

7. 異端審問を警戒するセルバンテス

エラスムス思想の影響、マルセラの弁明、そして第11章と第14章の構造の対照性から、セルバンテスはマルセラを、《神》との《結婚》を念じたためにグリソストモとの《結婚》を拒みグリソストモを死に至らしめた者として造形した、という点が明らかになった。グリソストモの死をとおして、過度な信仰は《人間》を滅ぼすこともある、とセルバンテスは訴え、批判している。本エピソードの最大のテーマは過度な信仰に対する批判なのである。

ところが、大多数の読者は、グリソストモが死んだのはマルセラから愛を得られなかったためだと考えるだけだ。また、研究者たちは、本エピソードを「グリソストモとマルセラのエピソード」と名付けて考察の対象とし、第11章と第14章の構造の対照性に気づかず、グリソストモとマルセラの恋愛問題にしか目がいかない。ライリー (Edward C. Riley) は、グリソストモは彼が愛したマルセラから拒絶されただけの理由で自殺したと考え、本エピソードは愛を問題としていると結論づけている²⁶、本田も、本エピソードは情熱的な愛におぼれて死んだ男グリソストモを教訓として示すことで、愛の実相を伝えようとしていると考えている²⁷。またアバリエ=アルセ (Juan Bautista Avalle-Arce) をはじめとする研究者の多くは、本エピソードが古代ギリシア・ローマを起源とする牧歌詩の影響を受けて発展した牧人物語²⁸をもととするエピソードだと見なしている。牧人物語は男女間の愛をテーマとする²⁹。彼らはそこに男女間の愛の問題

や牧人物語の影響を読み取るが、《神》との《結婚》の問題にまでは思い至らない³⁰。

これは、異端審問が機能していた時代³¹、《神》との《結婚》という信仰態度に疑問を投げかける、当時から見ると過激な批判を、なるべく曖昧で不明瞭に表現しようとセルバンテスが腐心しているからだ、と思われる³²。この腐心はセルバンテスの取り越し苦労とはいえない。セルバンテス死後の1624年、ポルトガルの異端審問所が『ドン・キホーテ正編』第13章の一部と第17章の一部と第26章の一部の削除を命じているからだ³³。(第26章の箇所は異端審問の危険を察知したセルバンテスがすでに1605年の第二版で書き換えていたとアメリカ・カストロは指摘している³⁴)。たとえわずかでもキリスト教信仰に対しての批判をあらわそうとしなかったのは、セルバンテスの過剰な警戒ではなかったのだ。

セルバンテスは、エラスムスから懐疑的思想の影響を受けていた、と言われる³⁵。エラスムスは、確立した既成の権威に対して疑問を抱き検討を求めている³⁶。セルバンテスは、教会体制を激しく攻撃するわけではないが、さまざまな書き方で同時代のキリスト教者たちを揶揄している、と考えられる。たとえば、キホーテの村の司祭をはじめ、『ドン・キホーテ』に登場する多くの聖職者を滑稽化し、権威をくさしている³⁷。

教会体制批判について敏感だった時代、《神》との《結婚》に対する批判が容易には読み取れないよう、セルバンテスは意図していたのである。

8. アンブロシオの碑文の役割

セルバンテスは、《神》との《結婚》に対する批判という、当時から見ると異端的な考えである本エピソードの最大のテーマがおもてだたないようにするため、このテーマを男女間の愛にカムフラージュしている。

まず、第12章でセルバンテスは、山羊飼いペドロに、「マルセラを愛したためにグリソストモは死んだ」と語らせる(103)。これによって、二人の問題は恋愛関係のもつれでしかない、と読者に思わせている。

次に、第14章でビバルドが音読する『絶望の歌』を読んだ読者は、グリソス

トモはマルセラからの愛を得られなかったというだけの理由で死んだと思込む。

マルセラから拒絶されたグリソストモは、絶望の思いを〈ぼく〉と〈きみ〉を主人公にした『絶望の歌』に綴る³⁸。これは、第11章でオラーリャに失恋したアントニオが彼の〈司祭である叔父〉に作ってもらった〈希望の歌〉を歌ったことに対応する。つまり、〈司祭である叔父〉がアントニオに希望を与え、そのためアントニオが〈希望の歌〉を歌ったのに対して、マルセラがグリソストモに絶望を与え、そのためグリソストモは『絶望の歌』を書いたのだ。

グリソストモがマルセラに絶望した一番の原因は、彼女が《人間》との愛を受け入れず《神》との《結婚》を念じたことにあった。しかし、セルバンテスはここでこの問題を後景化する。『絶望の歌』を読んだ者は、グリソストモは愛のためだけに絶望したと思込むのだ。

そして、本エピソードがグリソストモとマルセラの〈愛と死の物語〉でしかないと多くの読者に見なされる最大の要因は、グリソストモの友人であるアンブロシオが彼の死を悼んで、墓石に刻むよう注文する碑文である。

本エピソードの最後で記される碑文は、実らぬ愛のため命を絶った羊飼いが眠る、という内容の8行の短い詩だ。この詩は『絶望の歌』をプレテクストにしている。『絶望の歌』を読んでいたアンブロシオは、『絶望の歌』のなかの「愛の王国の残忍な暴君」(en el reino de amor fieros tiranos) (122)を、

愛という暴君は	con quien su imperio dilata
そのため王土を拡張した	la tiranía de amor (129).

の2行に書き換え、愛の恐ろしさを伝えている。

この碑文に『絶望の歌』からの連続性を見て、テキスト中の人物ばかりでなく、読者までもが、『絶望の歌』の男女〈ぼく〉と〈きみ〉はグリソストモとマルセラであり、グリソストモは激しい愛の犠牲者でしかないとあらためて思込む。グリソストモとマルセラという若い男女間の〈愛と死の物語〉が前景をおおい、《神》との《結婚》の問題は完全に隠れてしまうのだ。

こうして、本エピソードの最大のテーマは男女間の愛だと一般に考えられるようになるのである。

9. マルセラをひそかに批判するセルバンテス

しかし、実はセルバンテスは、本エピソードにおいて《神》との《結婚》を望むマルセラから拒絶されたために自殺するグリソストモを描くことで、《人間》との《結婚》を拒絶し《神》との《結婚》を念じるマルセラを批判しているのである。

実際セルバンテスは、《神》との《結婚》を念じるマルセラを、一見不適當な二つの形容句によってひそかに激しく批判している。

まず第12章で、「悪魔にとりつかれたマルセラを愛したためにグリソストモは死んだ」(103)と山羊飼いペドロは言う。また第13章においてアンプロシオはマルセラに対する悪口雑言の中で、「・・・グリソストモがあの人間の大敵ともいうべき女を初めて見たのは・・・」(117)と言う。

「悪魔にとりつかれた」とか「人間の大敵」など、マルセラには一見不適當と思われる二つの形容句を、多くの読者が読み飛ばしてしまいそうな箇所では彼女に向けることによって、セルバンテスは過度な信仰をもつマルセラをひそかに批判しているのだ。

では、なぜマルセラを批判するときセルバンテスは彼女を「悪魔にとりつかれた」「人間の大敵」と形容するのだろうか。それは過度な信仰をもっているがために逆説的にマルセラは〈悪魔〉となってグリソストモを自殺に追い込み、グリソストモという《人間》を破滅させてしまったからだ、と考えられる。

そこで、自殺に至るまでのグリソストモの《神》に対する考え方やマルセラへの思いについて考察しながら、いかにセルバンテスが過度な信仰をもつマルセラを批判しているか見ていきたい。

10. サラマンカ大学法学士グリソストモ

マルセラから真意を聞かされていたグリソストモは³⁹、信仰に対するマルセラの考えに共鳴できなかった、と考えられる。なぜなら、グリソストモはサラマンカ大学で学んだからだ(104)。スペイン17世紀、異端審問が機能していた時代にもかかわらず、サラマンカ大学は狂信的とも言える信仰⁴⁰から遠く隔たった場所にあった。

サラマンカ大学は現存するスペイン最古の大学である⁴¹。グリソストモは「サラマンカ大学で長いあいだ勉学を積んできた」(104)と、セルバンテスはグリソストモの出身大学名を明記している。

『ドン・キホーテ』には、サラマンカ大学の他に、正編第1章においてキホーテの村の司祭の出身大学ということでシグエンサ(Ciğüenza)大学という名が、また『ドン・キホーテ続編』(*Segunda parte del ingenioso caballero don Quijote de la Mancha*, 1615)第1章と第47章において登場人物の出身大学ということでオスーナ(Osuna)大学という名が記されているが、この点に関して牛島は「シグエンサ大学は三流大学の代名詞であり、村の司祭が風刺されている⁴²」、「当時の三流大学のオスーナ大学は風刺的に用いられている⁴³」などとシグエンサ大学とオスーナ大学が明記される効果を指摘している。これと同様に、グリソストモの出身大学サラマンカ大学にもセルバンテスは意味を込めている、と筆者は考える。

グリソストモはサラマンカ大学で狂信に陥らないための知性や理性を養うことができた、ということセルバンテスは暗に示したかったから、グリソストモはサラマンカ大学を卒業した、と記したのではないだろうか。

サラマンカ大学は法学研究で有名な大学であった⁴⁴。法学とは《人間》のための法であり、世俗の法だ。つまり、世俗であるという点で、《神》を深く知るための学問である神学に対立する学問である。また、異端審問の厳しい時代にありながら、サラマンカ大学では1561年からコペルニクス(Copérnico)の地動説が選択科目として開設された⁴⁵。コペルニクスの地動説は《神》を中心とする考えとは正反対である。これらのことは、サラマンカ大学がキリスト教に縛られない自由な学風を有していたことを示している⁴⁶。

そして、グリソストモはサラマンカ大学卒業後、「とりわけ占星術にすぐれ」、「豊作凶作を予測できた」とテキストに記されている(104)。

占星術はキリスト教会では異端視されていた。キリスト教会は、「占星術が教会とは相いれない真理の源を、したがって相いれない権威の源を供給している⁴⁷」と考えたのだ。グリソストモはサラマンカ大学で占星術を学んだと考えたと、サラマンカ大学は当時異端的ともいえる思想が学べる大学だったという

ことになる。

サラマンカ大学というキリスト教に縛られない自由な環境で法学や当時の異端的な学問に触れたグリソストモは、高度な知性を獲得し、《神》は《人間》にとってどんな存在か学問的に思考していた、と考えられる。そのおかげで、グリソストモは、マルセラとは対照的に、過度な信仰に走ることはなかったのである。

11. グリソストモの苦悩の複雑さ

グリソストモから見ると、マルセラの信仰態度は世俗レベルをはるかに超えた、狂信だ。愛するマルセラの信仰態度を知ったときのグリソストモの思いはひどく複雑だった、と筆者は考える。なぜなら、マルセラが強く憧れていた《神》を、グリソストモも世俗レベルで信仰していた、と思われるからだ。

テキスト中、カトリック信仰が一般的だった17世紀に生きているグリソストモは、現代に生きるわたしたちが想像する以上に信仰に篤かったに違いない。彼は「村人の誰もが非の打ちどころがないとほめそやすほどの聖歌や聖体神秘劇を書いた」(105)と記されている⁴⁸。キリスト教を真摯に仰いでいたからこそ、グリソストモは聖歌や聖体神秘劇が書けた、と思われる。

グリソストモも《神》に対して真摯な思いを抱いていた。しかし、サラマンカ大学で学んだ彼は、マルセラのような狂信的な態度で《神》を信仰しなかった。そして、マルセラから拒絶されたことに苦悩した彼は、彼女の拒絶の理由が彼自身も長い間信仰してきた《神》のためだと知って、彼の苦悩は複雑化し、一層深まったのではないだろうか。

このように、マルセラへの愛と、《神》への信仰という、からみ合った二重の苦悩を、グリソストモは抱えていたのである。

12. 自殺したグリソストモと「悪魔にとりつかれた」「人間の敵」マルセラ

マルセラと《結婚》できなかったグリソストモは、過度な信仰をもち《神》との《結婚》を念じるマルセラに絶望して死ぬが、彼の死因は明らかにされていない⁴⁹。ペドロやアンブロシオの語るグリソストモの苦悩などのコンテクストから、グリソストモは自殺したと思われるが、自殺したとセルバンテスは明

言していない。これは、7で記したように異端審問の監視の目を逃れるため、自殺を厳禁するキリスト教信仰に抵触しないようセルバンテスが曖昧に表現しているからだ、と考えられる。

グリソストモは、自分も信仰していた《神》をマルセラが過度に追い求めるため彼女から受け入れてもらえないという、複雑な苦悩を抱え、マルセラに絶望した。そのグリソストモに、セルバンテスは、キリスト教が厳禁する自殺を犯させているのではないだろうか。

キリスト教信者グリソストモが自殺という大罪を犯すのは、《神》との《結婚》を念じるマルセラに拒絶され、絶望したためだ。つまりマルセラは、《神》を過度に信仰したがゆえに、アイロニカルなことに、グリソストモを地獄に落とす〈悪魔〉と化してしまったのである。そのためセルバンテスはペドロに、マルセラを「悪魔にとりつかれた娘」と形容させているのだ。そして、グリソストモという《人間》を自殺へと誘う〈悪魔〉のようなマルセラは、アンブロシオが言ったように、「人間の大敵」なのである。

マルセラが《神》との《結婚》を念じたために、グリソストモは自殺に追い込まれたのである。

「悪魔にとりつかれた」「人間の大敵」と形容することで、セルバンテスはマルセラを激しく批判している。それは、マルセラが過度な信仰をもっているからなのである。

13. 行き過ぎた模範マルセラ

第14章の後半で登場するマルセラは、弁明のなかで、グリソストモは彼自身の執拗さによって死んだ、と言う(126)。グリソストモはマルセラとの愛を育めず《結婚》できなかつたため死んだにもかかわらず、マルセラは、自分にはまったく責任はないと言い放つ。しかし、マルセラが自分の正当性を主張すればするほど、一部の読者にはマルセラの冷酷さがはっきりと見えてくる⁵⁰。マルセラのこの冷酷さは⁵¹、彼女が《神》との《結婚》を願い、《人間》に愛を抱けなくなったからなのである。

にもかかわらず、マルセラが弁明後立ち去ると、多くの人は「彼女の思慮深

さに感心する」(128)。さらに、キホーテはマルセラを次のように言って称賛する。「この世の善良な人すべてから敬愛され、崇拜されてしかるべきだ」(128)。

どうして「悪魔にとりつかれた」「人間の大敵」マルセラはみんなから称賛されるのだろうか。

それは、マルセラは信仰の真摯さから見ると、純潔を守り一途に《神》を信じているという点で、すばらしい女性であるからだ、と考えられる。キリスト教信者としてのマルセラは、村の人々にとっても、キリスト教への奉仕を標榜する騎士道精神に生きるキホーテにとっても、憧憬の対象であり、模範なのだ。

しかし、視点を変え日常生活の場での信仰という点から見ると、彼女は行き過ぎた存在だ。家を出て自然の中で孤独に《神》を求めるマルセラは、一般の信仰態度をはるかに超えている。

マルセラはある種の狂信に至り《人間》に対して不寛容になった女性なのである。

14. 「グリソストモの葬式のエピソード」についての研究の結論

エラスムス思想の薫陶を得て《結婚》に強い関心のあったセルバンテスが著わした「グリソストモの葬式のエピソード」の最大のテーマは、《神》との《結婚》に対する批判であった。それは第11章のアントニオと第14章のマルセラが《結婚》に対して対照的な考えを持っていることから浮き彫りにされていた。

〈司祭である叔父〉をもつアントニオは《人間》との《結婚》を望んだ。アントニオとは対照的に、彼と同じく〈司祭である叔父〉を持つマルセラは、《神》との一体化、つまり《神》と《結婚》したいと念じるようになった。

宗教に束縛されない自由な学風のサラマンカ大学で学んだグリソストモは、《神》を極端に信仰するあまり彼との《結婚》を拒むマルセラに絶望した。そして、彼自身も信仰していた《神》の教えに逆らって、彼は自殺した。つまり、グリソストモは、マルセラによって、自殺という大罪へ誘惑され、地獄の底に突き落とされたのだ。《神》のそばにいることを念じた天使のようなマルセラは悪魔と化した。マルセラは、日常生活上の信仰の境を越境し狂信に走り、その結果《人間》に対して不寛容になってしまった者たちの象徴であった。グリ

ソストモは、17世紀の宗教体制や、そこから生じた狂信や不寛容に苦悶する《人間》たちの象徴であった。グリソストモを絶望の淵に追いやり自殺へ追い込むマルセラは、それゆえセルバンテスから「悪魔にとりつかれた」「人間の大敵」と呼ばれ、批判の対象とされているのである。信仰という観点に立てば、たしかに、マルセラはすばらしい信者ということもできた。そのためキホーテをはじめ多くの人から称賛された。しかし、マルセラの信仰は、日常生活上のレベルをはるかに超え極端に至り、不寛容な姿勢を貫いた狂信であった。

グリソストモの自殺によって王土を拡張したのは、アンブロシオがグリソストモの墓石に刻もうとした「愛という暴君」ではなく、〈狂信と不寛容という暴君〉なのだ。

エラスムスの《人間》中心思想の影響を受けたセルバンテスは、アントニオの〈司祭である叔父〉が望んだように、現世の幸せは《神》への穏やかな信仰を持ちながら《人間》と《結婚》することにあると信じていた。なぜなら、セルバンテスは、《神》との《結婚》を念じるマルセラと《結婚》できなかったグリソストモに、『絶望の歌』を書かせ自殺させているのに対し、アントニオには、オラーリャとの愛が実る〈希望の歌〉を歌わせ彼に希望を抱かせているからだ。

しかし、異端審問を警戒していたセルバンテスは、自分の考えを声高には叫ばなかった。「グリソストモの葬式のエピソード」をとおして、狂信と不寛容が生み出す非人間性を、理解できるひとにだけひそやかに、セルバンテスは訴えているのである。

注

¹ 『ドン・キホーテ正編・続編』は現在『ドン・キホーテ前編・後編』と呼ばれるが、セルバンテスは執筆当時、前後編にする意図はなかったと考えられるので、筆者はそれぞれを正編、続編と呼ぶことにする。

² キホーテは「この世の善良な人すべてから敬愛され、崇拜されてしかるべきだ」(128)と言ってマルセラを称賛する。弁明を聞く村人たちも「彼女の思慮深さに感心する」(128)。

- ³ 『ドン・キホーテ』のテキストはFrancisco Rico 編 *Don Quijote de la Mancha*, Madrid : Alfaguara, 2004を底本とした。テキストの引用のあとに付した括弧内の数字はすべて上記のテキストからの引用ページをあらわす。
- ⁴ 本田は、グリソストモとマルセラの関係においては、マルセラの主張に「完璧な正当性」があり、グリソストモの「完全な一人相撲の悲劇」であったとし、マルセラの態度や弁明の言葉を支持している。本田、2005、p.66.
- ⁵ 引用文の翻訳にあたっては、以下注6であげる六つの『ドン・キホーテ』翻訳版を参考に、筆者がおこなった。
- ⁶ 『ドン・キホーテ』の日本語訳は永田寛定・高橋正武共訳（岩波書店）、会田由訳（筑摩書房）、牛島信明訳（岩波書店）、荻内勝之訳（新潮社）、岩根園和訳（彩流社）、岡村一訳（水声社）の六つの翻訳版があるが、永田・高橋だけが「悪魔につかれた」と訳し、ほかの訳者は「邪悪な」の意味で訳している。たしかに「邪悪な」の意味でも文意は成立するが、悪魔diabloの派生形容詞endiablado/aをセルバンテスは意図的に用いている、と筆者は考える。
- ⁷ 悪魔は、ユダヤ・キリスト教的な伝統において、悪の最高に具現化されたもので、サタン(Satán)と同意。リヴィングストン、p.330. 墮落した天使のかしら。 *ibid.*, p.21.
- ⁸ マルセラへの求愛や求婚に関する叙述は以下がすべてである。「男たちはマルセラの叔父に、彼女を妻にしてくれるよう懇願していた」(106)。「マルセラは結婚を勧められても、いまのところ結婚する気はないと答えていた」(107)。「マルセラは男達から思いを打ち明けられると、それが結婚の申し込みであっても、激しく拒絶していた」(108)。これらを見ると、男性からの愛を受け入れないマルセラは、もし形容するなら、〈男の敵〉といえるだろう。
- ⁹ スペインではコンベルソ(*converso*) (改宗ユダヤ人)の存在が宗教的・社会的問題となっていた。コンベルソの改宗の真偽を問うための装置が必要とされ、イサベル1世(Isabel I la Católica)は1480年セビーリャ(Sevilla)に最初の異端審問所を設置した。異端審問は異端審問会議の管轄下におかれ、押収財産の処分や審問手順を記した『異端審問指図書』の作成などがなされ、その権限はスペイン王国全土におよんだ。イサベル1世とフェルナンド2世

(Fernando II el Católico)のカトリック両王(los Reyes Católicos)は、1492年ユダヤ教徒追放令を、1502年イスラム教徒追放令を公布し、スペイン王国から異教徒の存在を消し去るとともに、異端審問によって、カトリック信仰による王国の宗教的統一を達成した。関他、pp.255-59。17世紀には、異端審問所の権限は最大となり、異端審問のネットワークはあらゆる地域にまで張りめぐらされていった。そのため、人々は異端者と目されることを恐れ、信心深くないと思われることがないように、わずかでも教理に触れるような問題について意見を自由に述べることは避けるようになった。ドミンゲス・オルティス、pp.142-45。こうしてスペインは不寛容の精神を貫こうとしたのである。

- ¹⁰ アメリコ・カストロは『セルバンテスの思想』において、セルバンテスにおけるエラスムス思想の影響を文学史上最初に指摘した。セルバンテスのキリスト教は「管見によれば、時として、トリエント公会議の方向よりもエラスムスの方を彷彿とさせる」（カストロ、2004、p.421）とか「我々はいつもさまざまな道を通って、同じ結論にたどり着く。つまり、セルバンテスのキリスト教は本質的にエラスムス主義である」（*ibid.*, p.495）などと、セルバンテスにおけるエラスムスの影響について全編にわたって説いている。また『セルバンテスへ向けて』において「言えることは、セルバンテスの良き師（フアン・ロペス・デ・オヨス(Juan López de Hoyos)：筆者注）はエラスムスをよく読んでいて、エラスムスのことをよく弁えていたということである。・・・ロッテルダムの人文主義者（エラスムス：筆者注）の名前や教義が、彼とその《親愛なる弟子》（セルバンテス：筆者注）との会話に、当然のごとく出たとしてもおかしくはない」（カストロ、2008、p.264）と、影響の原因についても触れている。伝記『セルバンテス』の著者カナバジジョ(Jean Canavaggio)も、1568年マドリッドで逝去した、フェリペ2世(Felipe II)王妃イサベル・デ・バロイス(Isabel de Valois, 1546-1568)のために、師であるエラスムス的人文主義者フアン・ロペス・デ・オヨスが編集し翌年出版された公式の追悼文書に、セルバンテスは自作の詩4編を載せてもらっているという点から、セルバンテスはフアン・ロペス・デ・オヨスの弟子の中でも愛弟子でありフアンからエラスムス思想の影響を受けていた、と考えている。カナ

バッジオ、pp.54-58. 筆者も、セルバンテスはエラスムス思想の薫陶を大いに受けていたと考え、拙論を進めていく。

¹¹ エラスムス、p.206. また、『校訂新約聖書』(Novum Instrumentum, 1516)の注解や『結婚礼賛』(Encomium Matrimonii, 1518)、『キリスト教的結婚教育』(Institutio Christiani Matrimonii, 1526)、『再婚論』(Vidua Christiana, 1529)において、エラスムスは、結婚に純潔を求めることこそ人間的である、と考えている。ibid., p.207 (訳注2). 結婚に純潔を求めるとは、愛情ある男女が結婚し、愛と性によって生活を営むこと、という意味のエラスムス流の言い方だと筆者は考える。結婚は生活に幸福をもたらすものであるとエラスムスは説いた。杳掛、p.101.

¹² これは書名ではなく詩の作品名であるが、イタリック体で記されている。

¹³ 注10を参照。

¹⁴ セルバンテスは異教的なルネサンス思想やエラスムス主義の人文主義的教養を身につけた教養人であったが、社会的周縁にあったため自らの思想を表立って表現できなかつたとアメリコ・カストロは唱えている。本田、2004、p.660. 社会的周縁にあったとはセルバンテスの家系がコンベルソであったということである。この説に立脚しカストロは『セルバンテスとスペイン生粋主義』でセルバンテスを論じている。セルバンテスがコンベルソの家系にあったというカストロの考えについて、筆者は目下明確な意見をもっていないが、エラスムス思想に関してはカストロの考えに賛同し、論を展開していく。

¹⁵ 注11を参照。

¹⁶ エラスムスやルイス・ピベス(Juan Luis Vives, 1492-1540)やセルバンテスなどのキリスト教人文主義者の大きなテーマである《結婚》を賛美することは、牧人物語を基とする『ドン・キホーテ』のエピソード(本エピソードの他にレアンドラ(Leandra)のエピソード(正編第51章)と牧人に扮した男女のエピソード(続編第58章)とキホーテが牧人物語世界について語るエピソード(続編第67章)におけるセルバンテスの主要な目的であった、とエレーロは述べている。Herrero, pp.293-98. 彼らキリスト教人文主義者は、生きる喜びをもたらす真の愛は《結婚》という形をとって成立すると考えていた。セル

バンテスは新しい命をはぐくむ《結婚》を重要視しているのだ。

¹⁷『痴愚神礼賛』(*Encomium Moriae*, 1511)と並び、エラスムスの代表作である『対話集』は、1518年にラテン語会話教本の小冊子として刊行された。初版以来増補を重ね、1533年の最終版では対話59編を収めた大部の作品となった。『対話集』はカトリック側から執拗に攻撃・非難され、1522年異端の嫌疑をかけられる。1526年にはパリ大学神学部によって禁書とされた。しかし、59編すべてがカトリック体制や聖職者たちへの風刺や社会批判に終始しているわけではなく、テーマは世俗的なもの、宗教的なもの両方に及んでいる。沓掛、pp.96-98. 1523年増補版『対話集』に新作10編が収録されたが、10編のうち5編は恋愛・結婚がテーマである。そのなかの1編が「恋する青年と乙女」。当時結婚問題が思想上の重要問題になっていたことから、この版は『対話集』諸版のうちでも注目すべき版である。結婚に人生の理想を認めようとするエラスムスの主張は保守的な神学者の怒りと憎しみを呼び、結婚に関する彼の書物はパリ大学神学部などから異端の烙印を押され、禁書処分に付された。エラスムス、p193(訳注1)

¹⁸「恋する青年と乙女」の青年パンフィルスもグリソストモもそれぞれ、乙女マリアとマルセラを愛しながらも、彼女たちから《愛》を得られなかった。しかし、やがてマリアは《結婚》を承諾する。一方、マルセラはあくまで《結婚》を拒絶する。この結果グリソストモは自殺する。セルバンテスは、エラスムス作品の男女と同様の関係にありながら、彼らの生に対して男の死という対照的な結末を迎える、グリソストモとマルセラを描くことで、《結婚》の重要性を表している。エラスムス思想の影響を受けていたセルバンテスは、エラスムスの『対話集』所収「恋する青年と乙女」から《結婚》という大きなテーマを得て、本エピソードを描いたと考えられる。詳しい考察は鈴木、2011でおこなった。参照願いたい。

¹⁹ アメリコ・カストロは「セルバンテスの中でエラスムスに直接的間接的に(間接的なそれはあまり重要ではない)言及した部分やテキストの数は、もっと多く見つかるだろうと確信している」(カストロ、2008、p.269)とか「他にも(エラスムスの：筆者注)影響の跡がさまざまなかたちでこれからも出て

くるはずだと確信しているが・・・」(ibid., p.288)などと記しているが、本エピソードと「恋する青年と乙女」との強い関係については筆者が、鈴木、2011で最初に指摘したと思われる。

- ²⁰ マルセラは《神》について思いをめぐらすようになり、自然という修道院での禁欲的な生活をとおして《神》と一体化したいと考えるようになったのではないかという点は、鈴木、2011で考察した。参照願いたい。
- ²¹ テクストには、アントニオの歌のタイトルが〈希望の歌〉だとは明示されてはいないが、この歌には、希望 (esperanza) という言葉が出ているだけでなく、実際、この歌を歌うことによって、アントニオは希望を見出していった。そのため筆者は、この歌を〈希望の歌〉と呼ぶことにする。
- ²² 本エピソードにおける〈物語〉とは、〈受け入れがたい現実〉を受け入れるために人間が創造する虚構、と筆者は定義する。「ひじょうに受け入れがたい困難な現実につづかったとき、人間はほとんど無意識のうちに自分の心の形に合うようにその現実をいろいろ変形させ、どうにかしてその現実を受け入れようとする」(小川、p.22)。厳しい現実を生き延びるため人間は〈物語〉を創造していると考えられる。本エピソードにおける〈物語〉の働きについての考察は、鈴木、2010でおこなった。参照願いたい。
- ²³ この点については鈴木、2010でも考察しているが、本稿ではマルセラの〈司祭である叔父〉との比較から、新たに考察を加えた。鈴木、2010も参照願いたい。
- ²⁴ この点については鈴木、2010で詳しく考察している。参照願いたい。
- ²⁵ リヴィングストーン、p.190.
- ²⁶ ライリーは、本エピソードを悲劇的な愛の物語というよりも、むしろグリソストモの自殺がマルセラに与えた影響の物語だと考え、テーマは愛の問題だと考えている。Riley, p.101.
- ²⁷ 本田は、マルセラの自己弁護の言葉をもとに、本エピソードにおいて問題にされているのはエロスと自由意志の関係であり、作者が読者に伝えようとしたのは、究極的な愛の実相であると考えている。本田、2005、p.66.
- ²⁸ 牧人物語とは、古代ギリシア・ローマのテオクリトス (Teócrito) やヴェルギ

リウス (Virgilio) による韻文形式の牧歌 (égloga) を起源とする散文である。牧人とは羊飼いであるが、キリストは子羊のような人間を守る羊飼いにたとえられることから、中世において、牧歌にキリスト教の影響が加わり、イタリアでサンナザーロ (Lacopo Sannazaro) が韻文と散文から成る『アルカディア』 (Arcadia, 1504) を、スペインではガルシラソ (Garcilaso de la Vega) が韻文『牧歌』 (Églogas, 1533-36) を著した。そして17世紀、牧人物語という散文ジャンルはスペインで大流行した。牧人物語においては、理想化された自然の中に理想化された牧人が描かれている。Avalle-Arce, 1974, pp.13-17. 風景は詩的に描かれ、形式面では散文の中に登場人物の歌う詩が織り込まれている。Ferrerias, pp.47-48.

²⁹ 牧人物語とは「神々と人間と自然が調和して生きる牧歌的世界(アルカディア)を背景」に持つ「恋の悩み以外には悩みのない牧人たちが詩作と歌唱力を競うことくらいしか争いごとをもたない世界」を描いたユートピア文学である。本田、1999、p.506.

³⁰ アバリエ = アルセは、『スペインの牧人物語』 (La novela pastoril española, 1959) という一書を著し、その中で、「グリソストモの葬式のエピソード」についてページを割いている。彼は、「セルバンテスは、セルバンテス唯一の牧人物語である『ラ・ガラテア』 (La Galatea, 1585) 執筆20年後に出版した『ドン・キホーテ正編』において、セルバンテスにとって永遠のテーマである牧人物語に回帰し、本エピソードを書いた」と述べている。Avalle-Arce, 1974, p.249. たしかに恋愛の物語である牧人物語で描かれる男女の恋を枠組みにして本エピソードは〈愛と死の物語〉として書かれたと筆者も思うが、そうすることでセルバンテスは、《神》との《結婚》の問題を目立たなくさせていると考えられる。ジミックは、グリソストモは聖歌や聖体神秘劇などを書いていたという点に注目し、彼が歌や劇を書けたのは、物語を多読していたからだ、と見なしている。そこから、ジミックは、グリソストモの蔵書の中には、当時流行していた牧人物語があったはずだ、と推測し、それらの牧人物語を濫読したために、グリソストモは情緒過剰になり、学問的な見地から観察していた星や田や畑を、自分を主人公にした牧人物語世界の小道具や舞台として

眺めるようになり、ついには、自分自身を恋する牧人と同一化したと考えている。Zimic, pp.44-45. 知的なグリソストモが牧人物語に耽溺していたというジミックの仮説に、筆者は疑問を感じる。ジミックは、さらに、第14章でグリソストモの親友アンブロシオが牧人物語に描かれるような大仰な表現でマルセラを断罪する場面は、『ラ・ガラテア』第六の書における「ガレルシオ(Galercio)とヘラシア(Gelasia)のエピソード」のマウリサ(Maurisa)のヘラシアに対する断罪の言葉と類似している点を指摘し、本エピソードにおける牧人物語の影響を見ている。Zimic, p.50. (「ガレルシオとヘラシアのエピソード」において牧人ガレルシオは美しい牧女ヘラシアに失恋したため入水自殺を図る。ガレルシオが妹マウリサたちに助けられたとき、岩の上にヘラシア本人が現れる。マウリサから激しく責められたヘラシアは、三弦琴を弾きながら、何事に代えても美しい自然と自由を捨てることはできない、という内容の短い歌を歌うと、すぐに立ち去る。Cervantes, *La Galatea*, pp.481-85.) ガルシア・カルセドによれば、『ドン・キホーテ』の牧人物語エピソードは、「グリソストモとマルセラのエピソード」(正編第11章～第14章)、「シエラ・モレーナ山(Sierra Morena)での冒険」(正編第23章～第37章)、「レアンドラ (Leandra)のエピソード」(正編第50章～第52章)、「カマーチョ (Camacho) の結婚式のエピソード」(続編第19章～第21章)、「偽りのアルカディアのエピソード」(続編第58章)、そして「牧人キホティス (Quijotiz) の計画」(続編第67章)の六つである。García Carcedo, pp.23-61.

³¹ 注9を参照。

³² セルバンテスはいくつかの場面でいろいろと腐心している。第11章において、《人間》との愛を大切に考え《結婚》の喜びをこの世の喜びと認めている、アントニオの叔父が抱く《人間》中心思想を目だたせなくするため、これをアントニオのオラーリャへの恋歌〈希望の歌〉のなかにまぎれこませている。鈴木、2010参照。第13章でビバルドがキホーテに問う、騎士が決闘の前に加護を求めるものは〈思い姫か神か〉という質問は、〈思い姫への《愛》か《神》への信仰か〉という問いであるため、《愛か神か》という問題を導入していることになる。にもかかわらず、ここで《愛か神か》という問題が提示され

ているとは多くの読者は思わない。ここにセルバンテスの腐心がある。信仰熱が高まっていた17世紀に、《愛か神か》という、《神》に直接かかわる問題をあからさまに提示することはできなかった。そのため、キホーテを滑稽化しこの問題を後景化することで、同時代の宗教体制に疑問を抱いている者たちだけに、本エピソードは《神》を問題としていとひそかに読み取れるよう、セルバンテスは腐心しているのである。詳しい考察は、鈴木、2013でおこなった。参照願いたい。

³³ 第13章の削除については、牛島、前編 1、p.426. 第17章については、カストロ、2004、pp.431-32と牛島、前編 1、pp.428-29. 第26章については、牛島、前編 2、p.391.

³⁴ カストロ、2004、pp.430-31.

³⁵ フィネッロは次のように言う。「エラスムスが唱えるように、コンベルソの家系にあったと考えられるセルバンテスの精神に訴えたのはエラスムスの思想であった。教会権威のヒエラルキーよりも個人的な信仰を大切にするエラスムスの考え方に傾倒していたセルバンテスの作品中ではskeptic（懐疑論者的な：筆者注）な倍音が響いている」。Finello, pp.27-29.

³⁶ 『痴愚神礼賛』のなかで、エラスムスは、寛容の精神を説き、新旧のキリスト教の暴力闘争を否定した。改革はあくまでカトリック教会内で行われるべきだと考えていた。彼が主張したことは、ただ真の福音の探求と実践だった。渡辺、1972、pp.91-98. 渡辺は、“異端”という単語をギリシア語の語源にさかのぼって、真の意味を次のように説明する。異端 (heterodoxo) のギリシア語語源は、選択する (hairein) から派生していると言われるが、「選択する」とは、自由精神から生じるものである。この自由精神は、懐疑主義 (escepticismo) にも通じる。というのは、このescepticismoの原形であるギリシア語skeptomaiは、「検討する・調査する・探求する」の意味があり、やはり、自由検討の精神に属するものだからである。渡辺、1950、pp.7-8.この意味で異端を考えると、異端の本来の意味は、確立した権威に対して激しく抵抗・攻撃するものではなく、権威に対する異議申し立てであり、検討の要求であると言える。エラスムス思想の影響を受けたセルバンテスも狂信的な信仰態

度にひそかに異議を申し立てていると考えられる。

³⁷ セルバンテスは、キリスト教やキリスト教会を否定しているのではなく、教会で活動する下劣な聖職者たちを、皮肉やあてこすりで、テキストの中に描き、そのグロテスクな滑稽さを笑い者にすることで、彼らを批判の対象としている。たとえば、1. 村の司祭は、正編第6章でキホーテの蔵書である騎士道物語などの散文を焚書するため大真面目に選別するし、正編第27章では、キホーテを村に連れ戻すために一時的に女装する。2. 正編第8章で、大きなラバに乗り大きな眼鏡をかけ日傘をさしたサン・ベニート会の修道士を、キホーテは高貴な姫を連れ去る妖術師と見なす。3. 若くて美しい寡婦がたくましい平修道士と恋愛関係を結んだことを知った修道院長が彼女に、もっと優れた平修道士をいくらでも選べたらどうか、と言った、というエピソードを正編第25章でキホーテが語る。4. 正編第52章で、雨乞いのため聖母マリア像をかついで聖体行列をおこなっている聖職者たちを、キホーテは貴婦人をかどわかすものとみなし、彼らに襲いかかる。逆に、聖職者たちはキホーテを棒で激しく打擲する。キホーテが意識を失うと、聖職者たちはキホーテを殺してしまったと思い込み、怖気づいて逃げていく。5. 続編第32章で、公爵夫妻の館付きの聖職者は、キホーテの愚かしさを面と向かって批判したり、彼の反撃に生真面目に反応しては憤慨したりする。Torres Antoñanzas, pp.81-82. これらのエピソードでは、狂気の騎士キホーテが関わったり彼の目をとおしたりすることで聖職者たちの滑稽さが前景化されている、と筆者は考える。

³⁸ 『絶望の歌』にはグリソストモとマルセラの名前は出てこず、主人公の男女は〈ぼく〉と〈きみ〉としか記されていない。

³⁹ マルセラは第14章の弁明の場で次のように言った。「わたしの姿を見てわたしに恋心を抱いた男性にわたしは自分の気持ちを正直に伝えました」(126)。「グリソストモから思いを打ち明けられたとき、わたしの望みはこのままずっと孤独に生きることであり、共に暮らし移ろっていくわたしの美しさを享受できる者は、ただ大地だけだと彼に言って聞かせました」(127)。このようにグリソストモはマルセラから直接彼女の意思を聞かされていた。

⁴⁰ 注9を参照。

⁴¹ サラマンカ大学は、1218年、アルフォンソ9世（Alfonso IX）によって創設された、現存するスペイン最古の大学である。関他、p.153.

⁴² 牛島、前編1、p.416.

⁴³ 牛島、後編1、p.431. 牛島、後編2、p.436.

⁴⁴ 賢王アルフォンソ10世（Alfonso X el Sabio）は、1254年に、サラマンカ市当局に、教師と学生の特権（良質の住環境と食料の保障や一部の自治権など）保護を命じ、同大学に、ローマ法、教会法、医学、文法、論理学、音楽などの教師を配置したが、とくに重視されたのは、法学教師だった。法学は正義の源であり、これによって世界は裨益される、と考えられたからだ。関他、p.170.

⁴⁵ 関他、p.327. さらに、「授業が実際におこなわれた形跡はないのだが、教皇庁がコペルニクスの著書を1616年に禁書にしてからもサラマンカ大学の科目表には（コペルニクスの著書は：筆者注）掲載されつづけていた」（*ibid.*, p.327）。実際に開講されていないとしても、コペルニクスの地動説に通じていた教師や学生はサラマンカ大学にいた、と考えられる。この年代は『ドン・キホーテ』が出版された頃（1605、1615）である。

⁴⁶ さらに15世紀末のカトリック両王の時代には、コンベルソであった著名な人文主義者のネブリッハ（Antonio de Nebrija）がラテン語を教授した。関他、p.273. それほど自由な大学であった。

⁴⁷ バートン、p.137.

⁴⁸ テキストでは、グリソストモの紹介の箇所の最後に、「言うのを忘れていましたが」（105）と前置きして、グリソストモが聖歌などに興味を持っていたことを書きくわえている。これは、最後に記すことで、彼が信仰心に篤かったという点を強調したかったからではないか、と筆者は考える。

⁴⁹ 『絶望の歌』の中では、「ぼくの手刃物を」（122）や「丈夫な縄を手にも早く死へ旅立とう」（122）といった自殺を想起させる表現が見られる一方、『絶望の歌』以外の箇所では、「（グリソストモは）愛のために死んだ」（103）とだけ噂されているという点や、グリソストモが墓地ではなく大岩の下に埋葬して欲しいと望んでいる遺言に村の司祭は反対しているという叙述（103）

から、自殺者を墓地に葬ることを認めていなかった当時のキリスト教会の考えを念頭に置くと、自殺ではないとも考えられるなど、グリソストモの死因についての説明は曖昧である。グリソストモの死因が自殺か否か、という問題に関しての、主だった研究者の代表的な意見は次のとおりである。アメリカ・カストロは、『絶望の歌』の内容から、グリソストモは自殺した、と断言し、セルバンテスは自殺する者の深い孤独や苦悩を表現するために、キリスト教的でも模範的でもない内容を、多くの読者が読み飛ばすだろうと考える詩の中に表した、と述べている。カストロ, 2008, p.340. ロサレスは、『絶望の歌』は、「文学的な虚構、遊びごと」であり、自殺は、グリソストモが頭でこしらえた想像の産物でしかなく、グリソストモは自殺したのではない、と言っている。Rosales, pp.1039-45. 本エピソードを、黄金時代と鉄の時代、詩的過去と歴史的現在、恋愛の義務と自由意志など、対立する二つの要素から成立していると考えるアバリエ =アルセは、セルバンテスの時代、『絶望の歌』 *Canción desesperada* の *desesperada* という過去分詞の不定詞 *desesperarse* には、「絶望する」という意味の他に、「自殺する」という意味があったことを指摘し、本文の記述から判断すると、グリソストモの死は自然死ととれるが、詩の内容からはグリソストモは自殺したとともれ、タイトルの曖昧性は本エピソードに反映しているとし、上にあげた二項対立の範疇に自殺か否かという問題も加え、結局セルバンテスはグリソストモの死の原因を読者にゆだねている、と考えている。Avalle-Arce, 1975, pp.106-15. イヴェントッシュは、アバリエ =アルセに対し批判的で、本エピソードは、宮廷の理想が衰えたルネサンス以降、皮肉や嘲笑の対象となることもあった宮廷愛のパロディーで、愛に苦しむ男グリソストモは、愛の苦悩によっても高貴に詩的昇華されることなく取り乱して自殺したと、イヴェントッシュは考えている。Iventosh, pp.64-70. ジミックは、グリソストモは自殺したのだろうと考えている。ジミックは、まず、グリソストモは牧人物語を多読していたと仮定し、グリソストモは、読書家で夢想家だったために、牧人物語という文学的虚構を模倣し、自ら命を絶った、と考えている。Zimic, pp.44-45, 52-55. リケールは、冷淡で尊大なマルセラから拒絶されたことによって、グリソストモは、おそ

らく自殺した、と感想を述べ、セルバンテスはこの点を曖昧にしている、と考えている。Riquer, p.92. アバリエ=アルセの考えを参考にして考える本田は、本エピソードの物語（散文部分）の分析からもグリソストモは自殺したことが暗示されている、と結論づけている。本田、2005、p.233-42.

⁵⁰ マルセラは『絶望の歌』のなかの〈きみ〉のような残酷な仕打ちをグリソストモにしなかったと弁明することで、逆にマルセラは〈きみ〉よりもより冷酷であることが浮き彫りになるよう、セルバンテスは意図している。この点は鈴木、2012で論じた。参照願いたい。

⁵¹ ライリーは、とりわけマルセラが第14章の弁明の場で人々に問う「愛されるものは愛し返す義務があるのでしょうか」（125）という質問を問題視し、この問いに否と言えるマルセラにセルバンテス好みの自立した女性像を見ると同時に、彼女の思いやりや愛情の欠如も指摘している。Riley, p.101. ライリーもマルセラの冷酷さに気づいたひとりだと筆者は思う。

引用文献

第一次資料

Cervantes Saavedra, Miguel de. *Don Quijote de la Mancha*, ed. Francisco Rico, Madrid : Alfaguara, 2004.

—————. edición de Avalle-Arce, Juan Bautista. *La Galatea* Madrid: Epasa-Calpe, 1987.

第二次資料

Avalle-Arce, Juan Bautista. *La novela pastoril española*. Madrid: Istmo, 1974. (segunda edición corregida y aumentada)

—————. *Nuevos deslindes cervantinos*, Barcelona: Ariel, 1975.

バートン、タムシン. 『古代占星術—その歴史と社会的機能』豊田彰訳、東京：法政大学出版局、2004.

ドミンゲス・オルティス、アントニオ. 『スペイン 三千年の歴史』立石博高訳、京都：昭和堂、2006.

エラスムス. 「対話集」二宮敬訳、渡辺一夫編『エラスムス トマス・モア

- 世界の名著17』、pp.191-348、東京：中央公論社、1969.
- Ferreras, Juan Ignacio. *La novela en siglo XVI — Historia crítica de la Literatura Hispánica 6*, Madrid: Taurus, 1990. (primera reimpresión)
- Finello, Dominick. *Cervantes Essays on Social and Literary Polemics*, London: Tamesis, 1998.
- García Carcedo, Pilar. *LA ARCADIA EN EL QUIJOTE — Originalidad en el tratamiento de los seis episodios pastoriles*. Bilbao: Beitia, 1995.
- Herrero, J. “Arcadia’s Inferno: Cervantes’ Attack on Pastoral”. *Bulletin Hispanic Studies*, (1978): 289-99.
- 本田誠二. 「解説」、セルバンテス『ラ・ガラテア、パルナッソス山への旅』本田誠二訳、大津：行路社、1999.
- . 「解説」、カストロ、アメリカ『セルバンテスの思想』本田誠二訳、東京：法政大学出版局、2004.
- . 『セルバンテスの芸術』、東京：水声社、2005.
- Iventosch, Herman. “Cervantes and Courtly Love: the Grisóstomo-Marcela Episode of *Don Quixote*.” *Publications of the Modern Language Association of America* 89 (1974):64-76.
- カナバツジオ、ジャン. 『セルバンテス』円子千代訳、東京：法政大学出版局、2000.
- カストロ、アメリカ. 『セルバンテスの思想』本田誠二訳、東京：法政大学出版局、2004.
- . 『セルバンテスへ向けて 『わがシッドの歌』から『ドン・キホーテ』へ』本田誠二訳、東京：水声社、2008.
- 沓掛良彦. 『エラスムス 人文主義の王者』、東京：岩波書店、2014.
- リヴィングストン、E. A.編. 『オックスフォードキリスト教辞典』木寺廉太訳、東京：教文館、2007.
- 小川洋子. 『物語の役割』、東京：筑摩書房、2007.
- Riley, Edward C.. *Don Quixote*, Londres : Allen and Unwin, 1986; trad. esp. *Introducción al «Quijote»*, Barcelona : Crítica, 1990.

- Riquer, Martín de, *Nueva aproximación al Quijote*, Barcelona: Teide, 1989.
- Rosales, Luis. *Cervantes y la libertad*, Madrid: Ediciones Cultura Hispánica Instituto de Cooperación Iberoamericana, 1985.
- 関哲行・立石博高・中塚次郎編. 『世界歴史体系 スペイン史1—古代～近世』
東京：山川出版社、2008.
- Torres Antoñanzas, Fernando. *Don Quijote y el absoluto Algunos aspectos teológicos de la obra de Cervantes*, Salamanca : Publicaciones Universidad Pontífica de Salamanca, 1998.
- 牛島信明. 『ドン・キホーテ』訳注、東京：岩波書店、2001.
- 渡辺一夫. 『フランスルネサンス断章』、東京：岩波書店、1950.
- . 『寛容について』、東京：筑摩書房、1972.
- Zimic, Stanislav. *Los cuentos y las novelas del Quijote*, Madrid: Iberoamericana, 1998.
- 鈴木正士. 「アントニオの歌う〈希望の歌〉—『ドン・キホーテ正編』第11章についての新たな解釈の試み—」、『琉球大学欧米文化論集』第54号、2010.
- . 「結婚と純潔—『ドン・キホーテ正編』第14章におけるエラスムス思想の影響について—」、『琉球大学欧米文化論集』第55号、2011.
- . 「仕掛けられた宗教批判—『ドン・キホーテ正編』第14章『絶望の歌』についての新たな解釈の試み—」、『琉球大学欧米文化論集』第56号、2012.
- . 「キホーテの滑稽化による問題の後景化—『ドン・キホーテ正編』第13章についての新たな解釈の試み—」、『琉球大学欧米文化論集』第57号、2013.

Devoción fanática e intolerancia religiosa arraigadas en Marcela : interpretación del episodio del funeral de Grisóstomo, cap. XI a cap. XIV de la *Primera parte de Don Quijote*

SUZUKI Masashi

En el episodio, Marcela aparece descrita como una mujer discreta y recatada. Sin embargo, en el cap. XII, Pedro, un cabrero, dice sobre ella: “aquella endiablada moza de Marcela.” En el mundo cristiano el término “diablo” es una palabra radical. Además, en el cap. XIII, Ambrosio, un amigo de Grisóstomo, califica a Marcela de “enemiga mortal del linaje humano.” La razón por la que le dirigen a Marcela estas palabras tan severas, se debe a que Miguel de Cervantes Saavedra (1547-1616) la critica fuertemente. Cervantes, que alberga sus dudas hacia la devoción excesiva, critica veladamente a Marcela, quien desea de todo corazón el matrimonio con Dios, es decir la unión con Dios, y rechaza el matrimonio con los hombres. Para ello, describe a Grisóstomo como enamorado de Marcela y, al ser rechazado por ella, acaba suicidándose. Cervantes fue claramente influido por el pensamiento humanista de Desiderio Erasmo (1467?-1536). En el ideario humanista de Erasmo se valora mucho el matrimonio humano.

En el texto de *Don Quijote* no aparece concretamente cómo murió Grisóstomo, pero se da a entender que se suicidó. Si así fuera, tendría que ir al infierno porque cometió un pecado mortal, el suicidio. En resumen, irónicamente Marcela se ha convertido en el diablo que hizo caer a Grisóstomo, humano, en el infierno, porque ella anhela el matrimonio con Dios y rechaza la petición de matrimonio de Grisóstomo. En el episodio del funeral de Grisóstomo, Cervantes critica la devoción fanática e intolerancia religiosa en la España del siglo XVII, a través de Marcela y Grisóstomo, que acaba muerto por la exagerada devoción religiosa de ella.